

9 関宿町桐ヶ作の眼科医 高野敬仲

青 木 道 夫

青木クリニック

関宿町（現野田市）は、江戸時代に繁栄した城下町である。幕末の頃には、利根川・江戸川という二大河川により、舟運が発達し、いくつかの河岸が形成された。その河岸の一つに桐ヶ作がある。この河岸に六代続く、眼科医が存在していたが、いまだ日本眼科史に記載されていない。

今回、千葉県立関宿城博物館の協力を得て、高野家より公開された古文書・医学書・医療器具を調査研究したので報告したい。

一、高野敬仲の家系

①初代 高野敬仲

延享四年（一七四四年）に常州河内郡生板邑早井里に生まれる。竜ヶ崎城主土岐氏の家臣である秋山淡海守を祖にもち、父は秋山与兵衛という。敬仲は若時、

医師岑右膳を師として医学を学んだ。やがて、江戸の著名な眼科医、土生玄碩に師事した。敬仲は桐ヶ作にて秘伝の「めぐすり」、開明散、青眼膏を販売した。文化十年五月八日死亡し、竜ヶ崎の大統寺に葬られた。

②大年（二代目 高野敬仲）

大年に関する資料はほとんど残されていない。安永七年（天保十二年六月二十八日（六三歳で没）

③椿寿（三代目 高野敬仲）

高野家に残された資料のうち、椿寿に関するものが多い。高野家は医家として最盛期に相当する。利根川・江戸川の水運の発達により、患者の集中、葉の販売が活発におこなわれた。さらに、文人達との交流が深く、「利根川図誌」の著者、赤松宗旦や、古河藩の蘭学者鷹見泉石との交流、画を好み「鳳悟」という雅号をもち南画をよくした。江戸の画人、鈴木南嶺、大西椿年らとの交流が深く、数点の日本画が残されている。

④桃寿（四代目 高野敬仲）

三代目椿寿の時代にひき続き繁栄した。弟に石寿が

いる。茨城県取手に薬店を開き、敬仲の秘伝めぐすりを販売した。桃寿は文政七年七月二十日生、明治二一年九月三十日、六四歳没。

⑤周斎

五代目の周斎は「敬仲」を名乗った形跡がない。明治三年「従前開業医眼科高野周斎」と書いた開業看板を出し、医業を継続したが、精神的病の為診療を中断したことが資料に残されている。弘化四年七月十四日生、明治三八年四月二一日没。五六歳。

⑥早之助

唯一肖像画が残されている。その肖像画の帽子と衣服の徽章より済生学舎のものと判明した。高野家の資料の中に、済生学舎の前期・後期学課時間表と東京医学専門学校済生学舎規則が存在する。早之助は明治二六年七月二八日、結核のため二六歳で若死した。

六代早之助をもって高野家は閉院したが、多数の医療器具、医学書が発見され、博物館に収蔵された。

二、高野家に遺された医療関係資料

明治以来開放されたことのない高野家の土蔵の中よ

り、八十点を超える医療器具、六十点を数える医学書が発見された。

中でも特記すべき事は、杉田玄白らが翻訳した解体新書全五巻が、きわめて保存のよい状態で残されていたことである。第五巻目の解剖図は敬仲が本文より朱筆で名称を書き写し、勉強し易いようになっていた。

また高野敬仲の家伝葉が版木で刷られ、多方面にくすりの販売宣伝をしていた。毒吸膏、蘭名プロイム、家伝青眼膏、家伝開明散の薬効が版木に残されている。